

この素晴らしい不老不死者に祝福を！

よしどら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小さい頃から、彼女は様々な物に挑戦していた。

武器を振っていた。大人達はそんな物より球技を習わせたがった。

呪文の詠唱をしていた。大人達はそんな事より国語の文章を覚えさせたかった。

魔法陣を描いていた。大人達はそんな落書きよりも数式を書かせたかった。

昔からゲームやアニメが大好きな彼女は、とある一件で命を落とし…特典で不老不死を選んで転生する。

そして数十年の時を過ごし、様々な存在と出会った彼女は…地上に降り立ったアクアを見て、漸く自分の役目を思い出した。

「魔王討伐、忘れてました」

そんなぐうたらで努力家で鈍感な少女が、周りの女性を巻き込んでいくストーリー。

目次

原作開始前（時系列不同）

プロローグ 1

1話 8

2話 15

2・5話 21

3話 26

原作開始

0話 32

+1話 39

原作開始前（時系列不同） プロローグ

「…初めまして、暁真白さん。突然ですが貴女は死んで…：…へ？」

目の前に現れた女性が、私の姿を見て固まる。

…そういえば裸も同然の姿だったと思い出しつつ、私は特に気にしない様に微笑んだ。

それを見た彼女が小さくええ…と声を漏らしたのと同時に、私は小さく首を傾げる。

「えっと…：…その、服はどうしたの？ 虐められてた？」

どうしたもこうしたも、貴女は死んだ事を知っているではないかと逆に問いかけた。

簡単に言えば私は火事が発生した家に飛び込んで最後の最期まで人を助けて死んだだけだ。

その時に少しだけ服がボロボロになったただけだろうと、私はため息を吐く。

「そ…：…そう。それで死後の事なんだけど…」

「あ、異世界転生ってありますか？ あれ私の子供の時から夢でしたから」

その言葉を聞いて彼女の目が光る。

…それを見て私は少しだけ首を傾げるが…：…彼女は気にせずに嬉しそうに喋りだした。

それを私は特に気にする事もせずに、右から左へ話を聞き流す。

「…という訳で！ 転生特典を選んでね！」

話は終わった様だ。

取り敢えず適当に本を開けば、強そうな武器や防具が沢山出てくる。

…欲しいのが無いし、取り敢えず彼女に聞いてみる。

「…不老不死になれる特典ってありますか？」

「あるわよ」

「流石にありますよねえ……へ？」

私が欲しい物はあるならいい。

…と言うかそれがあるなら毎日鍛え放題じゃないか。

「…売れ残ってるんですか？」

「一時期は売れてたみたいだけどねー。今は使い手が居なくなっちゃってこうなったみたい」

「…使い手が、居なくなった？」

使い手が居なかったなら分かる。けれど居なくなったは可笑的だろう。

「不老不死」なら死ぬことは無い。

それなのにも関わらず居なくなるって事は……不死殺しがある世界なのだろうか？

「貴女が考えている程面白い理由じゃないわよ。唯友人が死んでいくのと、不老不死の所為で回りの人間から色々言われるのが辛かったらしくてねー」

「…その人は、どうなったんですか？」

「『私達』が殺したわ。不老不死で死なないなら不老不死を返して貰えれば良いんだからね」

「そうですか。では特典は不老不死でお願いします」

その言葉を聞いて、彼女が少しだけ耳をぴくつかせる。

…そして少しだけ悩んだ後に…小さくため息を吐いてからカタログを私の手から抜き取った。

「…不老不死を選んだ特典として、もう一つおまけで特典を追加してあげるわ」

「そんな特別扱いして良いんですか？」

「良いも何も創造神様からの指示よ。こっちで選ぶ代わりにもう一つ追加してやれってね」

「…どうして？」

「そうね…それは…きつと…」

どうしてかしらね。

小さく呟きながらため息を吐いた彼女を見て、私は少しだけ首を傾

げる。

「そうそう。貴女武器は扱えるのよね？」

「人並には」

「ふーん……じゃあこれ、使ってみて」

その言葉と同時に、彼女から鍵束を渡される。

…それを見て私は思わず首を傾げるが…彼女が小さく鍵を開ける動作をするのを見て、私も同じように鍵を宙に差し込んだ。

「…おお。武器が降ってきた」

「私が此処で客を待つ傍ら、暇だったから作ってみた物よ。一つ一つの性能は凄いいし、これだけで魔王を倒せるレベルよ」

「……う…そんなのが売れ残ってたんですか？」

私のその一言を聞いて、彼女は思わずため息を吐いた。

「…どいつもこいつも、腕が無いから使えなかったのよ」

「……ああ……」

「ま。あんたなら無駄に永い時間掛けて使いこなす事も出来るんじゃないの？」

そう言いながら彼女は小さく呆れた様にカタログを閉じ、そのままゆっくりと私に向かって近づいてくる。

…そして小さく……

「……………馬鹿。覚えてるって言ったのに」

本当に小さく、何かを喋っていた。

…もう一度聞こうとするが、その前に私の足元に魔法陣が描かれ…そして彼女が喋りだす。

「願わくば、貴女が魔王を倒す存在である事を祈ります」

転生してから〃数十年後〃

見知らぬ城から転移した私は、小さくため息を吐いてからゆっくりと鍵を使って武器を取り出す。

…そして其処から弓を番えると、そこら辺に置いてあった死体から

矢筒を貰っておいた。

「…此処何処？普通は街の中に転移とかじゃないんですかね？」

小さくため息を吐きながら、私は矢を番えて三本同時に放つ。

それと同時に朽ちていく魔物を見つめながら、私はゆつくりと身体を反転させて魔法を放つ。

「…ライトオブセイバー」

光の剣を使い、裏を取って襲おうとしていた敵を薙ぎ倒す。

…この魔法を覚えてくれたお姉さんには感謝してもしきれない。今生きているのだろうか？

そんな事を考えながらも、私は小さく伸びをする。

「…ふああ…」

数年間眠ってなかったからか、かなり身体が怠い様に感じる。

…：そろそろ見えていた街に行くかと、小さくため息を吐きながら私はゆつくりと目の前から出てきた蛙を斬り倒した。

「…素材は拾わなくても良いですね。面倒ですし」

仮に雪將軍レベルだったら拾っても良いだろうが、このレベルなら別に拾わなくても良いだろう。

…：本当に色々な事があったなあと小さくため息を吐きながらも、私はゆつくりと周囲を見渡した。

「…此処も昔と違ってますね。引退しようって考えてた冒険者さんはもう居ないのかな？」

一人の少女が、私に憧れて冒険者になった。その子は有名な魔法使いになった。

最期には、味方の為にリッチーになった彼女が居た。

親に止められても、産廃道具を作り続ける一人の少年が居た。

私に取引を持ち掛ける為に、魔王の使いを出された事もあった。

アクシズ教はやつぱり危なかった。やつぱりエリス様が一番。

旅をした時、沢山の日本人同業者と出会って…そして死んでいった。それが少しだけ寂しかった。

レベルドレインされた、仲間を作った。仲間が死んだ。友達を作った、友達が死んだ。

「駆け出しの街、アクセルへようこそ！」

少しかだけ思考を纏めていれば、私の身体は何時の間にか街に辿り着いていた。

…どうやら此処がアクセルらしい。

レベルドレインもされたので取り敢えず駆け出しには間違いないだろうと、私は小さく微笑みながら近くの男に話しかける。

「…ん。冒険者ギルドって何処にありますか？」

「冒険者の方でしたか！それでしたらあっちに行つてから……」

説明を聞きつつ、取り敢えずテレポートを此処に設定しておく。

勿論後で変えるだろうが、今はまあ此処で良いだろう。

それと同時に何処かから視線が感じたが…私は特に気にせず歩いていく。

「……此処ですか」

小さく呟きながら、私は扉を開けてギルドカードを取り出した。

…随分ボロボロだ。

旧式も旧式だし、もしかしたら機能しない可能性もある。

とうか読み取れるのだろうか？そんな事を考えながらゆっくりと前の人のギルドカードを見て見ると…

「うわっ」

「？」

「ごめんなさい何でもないです」

めっちゃ進化していた。

…寧ろこれ持ってきたら怒られるのではないのだろうか？

そんな事を考えつつも、私はゆっくりと列に並んで待ち続ける。

「次の方どうぞー」

「この更新お願いできますか？最近レベルドレインされてて」

「……えっと……これは誰かの遺品ですか？」

「私のです」

知ってた。

いやまあ分かつてはいたが、まさか普通に言われるとは思わなかつ

た。

「…いえ、そんなまさか…年代考えて…初期の…という事は…嘘ですよ？エルフでも死ぬ計算になりますよ!？」

「…いや、其処まではいかないでしょ」

「と、取り敢えず預かります！一応本人確認をする為に新しくギルドカードを作ってもらいますが…良いですか？」

「ん。良いですよ」

その言葉と同時に、私は1000エリスを渡してから手を置いてカードを作り出す。

…ハイテクだあ。

そんな事を考えながらも、私はゆっくりと彼女にカードを見せて微笑んだ。

…これで良いだろう？

「…ほ、本当に本人…え？この人若作りしてるの？」

「…それで、もういいですか？」

「あ、はい。昔のカードはどうしますか？」

「折角ですから貰っておきます。では」

その言葉と同時に私はゆっくりと手を挙げ…依頼の方を見に行っ
た。

…やっぱり初心者向けの依頼が多い。

何時か城とかあった場所に行こうかなとか考えながらも、私はその中から一枚の紙を取った。

「あ。こちらの依頼…いや…その…えっと、分かりました！」

早朝に近い時間だった為、殆ど誰もいなかったのも幸いして穩便に済んだ。

…その事に少しだけ安堵しつつも…私はゆっくりと外に向かって歩き出した。

「…大丈夫、かなあ…？」

私が受けた依頼は初心者殺し。

どうやら最近出沒して困っているらしい。

困ってるなら助けに行くのも良いだろうと、そんな事を考えて受け

た依頼だ。

「……………しろ、ちゃん？」

そんな此処での依頼を楽しみにしていたからか…小さく呟かれた声を、私は聞き漏らしてしまった。

「…やつと、見つけましたよ。私の下から離れちゃ駄目って言ったんですけれどね…？」

その所為でどれだけ大変な目に遭うかも、分からないで。

—1話

「…終わりですなぁ」

小さくため息を吐きながら、私はゆっくりと伸びをする。
初心者殺しは確かに強い…のだが、正直大量のスキルを持っていると苦戦しない程度の敵だ。

苦戦する事も無い敵を倒す事に少しだけ作業感を感じつつも、これも依頼を達成するためと自分に言い聞かせて敵を殺しきる。

「まあ流石に此処まで簡単だとは思いませんでしたが…上げてはドレイン上げてはドレインを繰り返した結果…と言う事なんでしょうかね？」

数十年単位でドレインされまくった人間は私しかいないので、神の加護のお陰なのかドレイン慣れしてしまったのかは分からない。

…こうやって弱者を狩るのは余り楽しいとも思えないし、正直此処に来たのは失敗だったかもしれないと考えてしまう。

「…まあ、駆け出しの街って話ですしね。しようがないと言えましょうがないんでしょう…これでは練習にもなりませんね…」

私は手で鍵束を持って余しながら、ゴブリンや死体から手に入れた武器を使って敵を倒していく。

別に武器を選ばなくてもこれなら、最終的に素手でも良かった気がする。

「…って、素手で虐殺してたらあの初心者殺しと言えどもやってきませんよね」

そもそも依頼の為に殺していたんだと、さっきまで覚えていた事を忘れていた私は小さくため息を吐く。

…やはり不老不死になっても記憶力低下が悩みの種何だろうか？
「…って、老後の憂いになつていますね。…ふむ」

今度あのデュラハンに記憶定着術でも教えて貰いに行くかな…なんて事を考えながらも、私は草陰から聞こえた音を聞いてゆっくりと手を握る。

「…さて、やりますか」

血の匂いに誘われて背後からやって来た初心者殺しを見ながら、私は小さく身体を横に逸らす。

それと同時に攻撃をしてきた初心者殺しを殴り付け、地面に落ちた初心者殺しの首元を斬り落とした。

一瞬で絶命をした初心者殺しを背負いつつ、私は街の場所を調べる為に魔法を使い始めた。

「生命共有」

何処かの少女が、アクセルに店を作ると言っていた筈なのでそれを祈って魔法を使ったのだが…

「……駄目ですね。死にましたか」

それか余りにも強くなって私の魔法が解除されてしまったのか。

そんな事を思いながらも、私は頭の中にある地図を思い出しながらゆっくりと歩き始める。

…方角を決め、小さく息を吸ってから歩き…

「…せめて墓でも作ってあげられたら…っ!?!」

出す瞬間、私の知っている様で知らない魔力の圧を感じ…思わず仰け反った。

……生命感知をしたのに逆に探知し返された？

そんな事今までされた事無いのに、一体誰が…

「どうやって?」

…誰かと言えば、あのリッチーになった少女だろうか?

いや、あの子の前で私が生命感知系を使った記憶は一切ないが…それだったら一応納得は出来る。

もしこの力を使って人類を滅ぼすのなら、私が直接引導を渡したいな。

「…つと、辿り着きましたか」

初心者殺しを背負いながらという事でまあ視線を感じるが、何も気にせずにギルドに歩き続ける。

…そして扉を蹴り開ければ……

「ギヤあああ!?!」

「ちよっ!?!扉がこっちに飛んできたんだけど何事!?!敵襲?敵来ちやつ

たの!？」

「魔王か?ゴ○ゴムの仕業なのか?!」

「ドン○サウザンドかもしれんぞ!」

「はいはい。我の所為我の所為」

「?昔に比べて扉が脆くなりましたね。前は全力で蹴つても壊れなかつたんですけどね」

蹴りの威力によって扉が一気に吹き飛んだのを見て、私は首を傾げつつゆっくりと前の案内嬢に向かって歩き出す。

全員が扉に吹き飛ばされたので真ん中を堂々と歩き…

「依頼終わりましたのでご連絡を。一応死体持ってきたので依頼完了で良いんですね?」

「へ?いや…え?」

「報酬は手払いでしたっけ?振込でしたっけ?最近記憶の混濁が激しくて…友人の名前すら覚えられないんですね」

「あ、いや扉…」

「そうそう。私今まで弁償した事無いんですね。過去に魔王の城に向かつて結界を決壊させたんですけど、魔王の幹部の首飛ばしたら許して貰えたんですね。いやーあの頃は楽しか…」

「扉が古かつたんですねー!いやー丁度新しい扉に変えたいとギルド内で話してたんですねー!いやー良かった良かった!」

「そうですか?それだったら脆かつたのでアダマントタイト製の金具を使うと良いですよ。扉吹き飛びませんから」

私が笑顔でそう言いながらお金を貰うと、案内の方が何か小さく呟きながら死んだ目をしている。

…最近そういう人達が多いですけど…流行なんですかね?

私はあんまり流行を知らない人だし、今度されたら聞いてみようかな。

「それではまた。報酬が無くなったら新しい依頼を受けに行きますね」

「…やっぱり報酬から差っ引い…あ、お待ちくださいマシロ様!冒険者ギルドのマスターからお手紙が届いています」

「…？えーつと…ああ、ふふふ…バカ、マスターになったんですね」
「ば…いえ、それでお返事は…」

「大丈夫だと思います。どうせ命令ですからね」

私の言葉を聞いて少しだけ驚いた様な表情を浮かべた彼女を見ながら、私は手紙を開けて内容をすぐに横目で見ると、

『これが見えているって事は本人だな。毎度お変わりなく元気そうでは何よりだクソツタレ。』

腰と腕が痛いし時間も無いから要件を書いておく。

今回の件はお前がずっと前から欲しいと言っていた職業を追加しておいた。

勿論お前以外が使おうとしたら速攻で死ぬ。アレはそういう物だ。諦めるよ？

その代わりにお前のスキルは保管される事になる。ま、いい加減冒険者から変わって事だ。

因みにこれは前マスターからの強制命令でもある。日本人俺は知ってるから大丈夫だが…

中々にお前は目の上のたん瘤だったらしいな。

最後にこの手紙は五秒後に消滅する。注意されたし』

最後の文面と共に私が手紙を上に向けて捨てれば、その手紙は周りの空気を吸収した後に瞬時に爆発した。

それと同時に私の周りに爆発が巻き起こり酒場の机が巻き込まれて吹き飛ばす。

…それを見つつ、私はゆっくりと伸びをしてから微笑みつつ…

「クラスチェンジお願いします。ギルドマスターからの勅命です」

「…は、ハヒ…」

私の一言を聞いて死んだ目をしたまま冒険者カードを使い、私がクラスチェンジをする。

…それと同時に私の身体に何か縛られる様な感覚を感じ…私は少しだけ苦笑した。

どうやら未だに私は条件を達成できている訳ではないらしい。

「…さて、挑戦してみますか。【レポート】」

私が喋るのと同時に私の身体は浮き上がり、それと同時に景色が瞬時に切り替わる。

爆風で吹き飛んだ冒険者ギルドではなく、私が生まれ育った森の中……その大樹の中の家だ。

……この大樹が喋らなくなつてどれくらいが経つただろうか？

枯れる事のない精霊の大樹、彼女と喋る事が一番の暇潰しだったのを思い出す。

「ただいまもど……」

扉を開け、部屋の中に入ると同時に……私の身体は一瞬で蔓に包まれた。

それと同時に扉が優しく閉められ、私の身体がふわりと浮き上がつて小さな手に包まれる。

……そして、私の身体の生命が大量にとられる感覚……慣れてしまったその感覚を受け止めながら私は少女の頭を撫でる。

「……おかえりなさい。おねえさん」

「今日も元気でいました？というか養分大丈夫ですか？」

「……むー。ばかにしすぎ。わたしだつてりっぱなあんらくしようじよなんだから！」

そう言いながらゆっくりと私を抱きしめて微笑む少女を見ながら、私は優しく彼女の実を優しく取つてから食べる。

「もう……何歳だっけ？」

「ひやくぐ(じゅっさいだよー！そろそろおうじよさまつてよばれてもよいとおもうのー！」

「王女様ねー……私に甘えたがりの王女様が居るんですかねー？」

「おねえさんはかわいくてやさしいからしようがないのー！」

私の言葉に頬を膨らませて返事を返しながらも、私の身体から手を放そうとしない。

寧ろ更に強く抱きしめたまま私の生命力を吸い取っているのを見つつ、私は優しく少女の身体を抱きしめた。

「最近私以外の人間から養分取つてないですよね？」

「あたりまえだよー！おねえさんいがいのようにぶんはまずいもんー！」

おねえさんのようぶんってふしのれいそうみたいなあじなんだー！」
「どんな味ですか」

懐かしい単語を聞きつつ、私は少女の身体を抱きしめて優しくベッドに転がった。

それと同時に私の身体を恐る恐る触り始めた後に…周囲の蔓が私の身体から離れ…私の顔を上目遣いで見つめた。

「…良いですよ」

「はーい…んっ」

私の唇に口付けを落とし、そのまま口を開いて舌を入れ始める。

それを受け入れながら、私はゆっくりと視界を暗闇に落とし始める。

…この安楽少女は本来、かなり遠くの森で養分を取る予定だったらしい。

それを発見した私を見て養分の補充をしようとしたらしいのだが…まあ、私が不老不死だった為一年くらいずっと補充していた訳である。

そして三年後、折角なら一緒に過ごそうと提案し受け入れられた後に…

『口付けが一番養分を取れるから！絶対！もし口付け許すなら他から養分吸わないから！シよ？』

という有無を言わさない一言と同時にキスをされたのは懐かしい思い出だ。

…一応本人談ではちゃんと養分を吸ってないらしいし、近くの街に行っても安楽少女の噂を聞かないから大丈夫だろう。

「んっ！…あ…ふああ…んっ…」

嬉しそうに声を上げる少女を抱きしめながら、私は力をゆっくりと緩めていく。

それと同時に我先にと舌が私の口を蹂躪するのを感じながら、私は小さく挨拶をするべく口を開く。

「おやふみなふあい…」

「…おねえさん、おやふみなふあい…」

挨拶を返すのと同時に、水音が小さく鳴り響き…私は満足して意識を闇に落とした。

—2話

良い天気芝生を踏みしめながら、私は伸びをする。

そしてそのまま左右に揺れつつ、テレポートで王城の用事を済ませながら小さく口を緩めた。

そして先程まで考えていたことを口に出すのも良いかと思い、パシンと音を鳴らして攻撃を受け止めながら私は笑顔で喋り出す。

「良い天気ですねー」

「っ！この！どうして周囲を眺めているのにも関わらず攻撃が当たらないんですか！っえい！えい！」

「どうしてかって言えば普通に貴女の攻撃が単調だからですよ。王女様」

お互いに組み手をしながら、私は欠伸をしつつ攻撃を避け続ける。

…今年で齡6となった少女を一方的に殴るのはどうかと思い、私にクリーンヒットを一回でも当てたら今日の授業は終わりとなっているのだが…

「…はあ…はあ…」

「もういい加減終わりませんか？8時間もぶっ続けてたら大変ですよ。というかこのまま続けたいなら並列処理位出来る様になって下さい」

「並列処理って何です?!スキルですか!？」

「スキルかどうかで言ったら技能スキルではありますね。勿論自分で鍛える系の物になりますけどね」

私が喋りながら攻撃を避け続けると、鋭い蹴りが私の顔面に飛んでくる。

攻撃し続けるという一方的な状況になると、ああいった大技を繰り出してしまふ。

勿論実戦では約に立たないので…

「あぐっ…お…え…」

「こんなに相手がピンピンしてる状態で大技をしないでください。隙だらけだから腹に蹴りを一発入れて見ました」

「ちよ!? 万が一王女様が子供が作れなくなったら…」

「その時は諦めて下さい。それとも明日から私以外の人に頼みますか?」

私の一言を聞いて真剣に悩み始めた近衛兵を見つつ、私は王女の方を見続ける。

…強く蹴り過ぎたか?

そんな事を考えながら一歩、二歩と近づこうとし…

「ツシッ!」

「相手が油断してる足音かどうか聞き分けなさい! 油断してたらクリーンヒットだったかもしれないけど今の一撃は油断してなかったら対処可能ですよ!」

「っ! はい、先生!」

最初はこんな少女が? とか色々ごねていたがどうやらちゃんと先生と認めてくれたらしい。

少しだけ気分が良くなりつつも、攻撃を避けながら私は冗談を言う為に少しだけ離れる。

「よし良い調子です。もしこのままちゃんと成長して、万が一子供が埋めなくなったら私が貰ってあげますよ」

「ほんとですか!?!」

「駄目に決まってるでしょアイリス王女!」

私の一言を聞いて目を輝かせたアイリスと、それを止める近衛兵を見ながら私は思わず苦笑する。

どうやらここら辺の貞操観念はまだまだらしい。

まあ最前線だから先に戦闘訓練を詰め込みたいと言うのも分かるが…先に貞操観念系の勉強をさせないといけなйдらうと少しだけ思ってしまった。

そんな事を考えつつ、私はアイリスに蹴りをお見舞いする。

今度は速度を付けて殴ればよいとか考えていたのだろう。置いた足に自分からぶつかって地面に倒れるアイリスを見た近衛兵が、苦しそうな表情で口を開く。

「…っ! これ以上は…」

「止めないでクレア！私は先生に認めて貰うんだから！そして立派な王女になってこのベルゼルグ王国を守るんです！」

良い咆哮だ。

そのまま私に鋭い一撃を入れようとしたアイリスを見ながら、私は心の中で小さく賛同した。

兎に角喋る事が大事なのであって、心の中で燻らせてるだけじゃそれは何もないのと同義だ。

私は宝物殿に置いてあった剣をアイリスに渡しながら、小さく微笑む。

「真剣を使つて、今のありつただけの想いを私にぶつけないさい。どうせ貴女の一撃程度だったら私は死にませんからね！」

「…っ！行きますー！」

「ちよつとその剣…」

近衛兵が感づき始めたがもう遅い。

アイリスが力を想いを籠め、その想いに共鳴して光が増し始める。

…それを見て私ははゆつくりと微笑みながら冷や汗を掻き始めた。

あつこれ私が不老不死じゃなかったら重症負ってたな。

「エクスウウウ!!」

「アイリス様!?それは人に放つて良い力じゃ…」

「テリオオオオオオオオン!!!」

巨大な光の剣が私に襲い掛かる。

それを見て私は鍵束から一つの武器を取り出し、それを片手で取つてから軽く一度光の剣に打ち付ける。

…それだけで私の身体は沈み込み、お互いの剣から嫌な音が鳴り響いた。

「…つつつよ…い…」

六歳でこれとかチートじゃん。

私もこんな力欲しかったなんて思いつつ、鍵束を再使用して二刀流の要領で光の剣を抑える。

…それと同時に光が分裂しそうな感じになり…私は思わず苦笑した。

「…まさかこれ、斬撃…っ！」

光の剣創造キットではなく斬撃を飛ばすスキルだと分かった瞬間、私は攻撃を受け止める方向から逸らす方向へとシフトした。

それと同時に光がどんどん強くなるが、必殺技には女神の恩恵だ。

武器を使って取り敢えず剣を逸らし、反す刃でアイリスの武器の先端を抑え付ける。

約一秒程度だが、その一秒によって斬撃が地面にぶつかり…：それに全てを掛けていたアイリスも倒れ込んだ。

それを見たクレアが慌ててアイリスの下に行くのを見て、私は小さくため息を吐いた後に…：城の外に向かって歩き出す。

此処からテレポートは出来ないので少し歩かなければいけないのだ。

「…：一つ教えて下さい。生きる伝説の少女」

「その称号は久々に聞きましたね。最近は鯖詠みババアって同業者に言われ続け…」

「貴女はどうやってその力を手に入れたんですか」

近衛兵の一言に、私の口と足が止まった。

…どうやって手に入れたなんて、毎日修行していたからとしか言えないのだ。

でも、どうして此処まで修行をし続けられたのか…：という問いの答えだったら私の答えは一つだ。

「…：友達を亡くし続けたら、誰だってそうなる」

「…：それは…何人程？」

「…：分からないよ。人数なんて」

本当は分かっている。

私の後ろには、何千の死体が転がっているのだ。

けれどそれを言った所できつと出るのは慰めの言葉だけだ。

「…：それだけ？」

「…：はい。辛い事を思い出させてしまって申し訳ありませんでした」

「別に辛くはありませんよ。悲しいだけです」

そういつてから歩き出すのと同時に、誰かからの悪口が聞こえた。
…化物が。とかそういう言葉は言われ慣れているから別に気にしない。

不老不死を願った時点で、その言葉は想定済みなのだ。

「……」

そして、私の友達は私化物とも仲良くなってくれる優しい人達だ。

…年代が続けば続く程、絆は深くなっていく。

それはモンスター然り人間然り…魔王然り。結局死を超越した者は誰もおらず、私は新たな出会いと別れを繰り返すのだ。

「折角だし今日はユグに会いに行きましようかね。最近出会ったあの子の調子も見ておきたいですし」

一度捕まった安楽少女に懐かれた私は、ユグと一緒に安楽少女の子育てをしていた。

…まあ、拾った私も悪いのだし偶には良いだろうと思いつながらも…私の足取りは軽かった。

ユグが大好きなお水を買って、安楽少女のあの子が好きそうな果物を買いつつ私は夕方の王都を駆け抜けた。

幸い明日もアイリスとの組み手をしなければいけないのだ。今日は少しだけ早めに行っても良いだろう。

「というか時間に遅れるとあの二人凄く怒るんですよ…全く、誰が育ててるのか一度はつきりさせないと……」

文句を言いながらも、私の顔には笑顔が溢れてしまう。

…ああ、今日も明日も、来月も来年も…願わくば一生。

「…こんな風に、ユグと私と…あの安楽少女三人で過ごせます様に」
『全く、帰ってきて直ぐに何を当たり前の事を言ってるの？それよりもあの水買ってきたんだよね？』

「おねーた。おか、リーー！」

「二人共ただいま。…いえいえ、今日人間に強くなる秘訣を聞かれていますね？」

森の中で私達の声だけが鳴り響き、それを聞いた狼達が雄叫びを上げる。

変わらない日常が続く様に、私達の絆もずっと続いていく。

『そうなの？大体不老不死のマシロに聴く事じゃないけどね』

「ねー」

「そうですね。二人は強くなりたいんですか？」

『私はねー…』

きつと、永遠に。

— 2. 5話

私とマシロ様のお話…ですか？

確かに幾らでもありますが…それだったら私がマシロ様を “先生” から一人の “少女” として認識した思い出を語っても宜しいかしら。

…ありがとう。余り人に話した事は無いからお聞き苦しいかもしれないけれど…頑張つて話すわね。

想像を超える、と言えば良いのでしょうか。

それともやはり期待通りだったと喜ぶのが良いのでしょうか。

結局彼女に傷一つすらつけられず、逆に私の身体はボロボロで。

王女相手に容赦ないと口を尖らせれば、「戦場では皇位は関係ありませんよ」とお叱りの言葉を受けてしまいます。

「…っ、あ、あ、あ」

「油断しないで下さいね。戦場で油断したら死にますよ」

「わがっでまっずう…」

「ならばよし。これくらいは簡単に終わらせて次に行きましょうね」

私の言葉に満足したのか大量の魔法を放ち、私に回避の練習をさせる伝説の少女を見ながら…過去の私は思わずため息を吐いてしまいました。

それと同時に私の髪の手先が焦げ始め、私は慌てて魔法を避けながら一歩踏み出そうとするのですが…

「っー」

「ちゃんと相手の技を確認して、何処の弾幕が薄いか把握しなさい！唯突っ込むだけでは火達磨になって終わりますよー！」

「っむ、むり」

私の悲鳴すら少女には届かず、結果火耐性を貫通した魔法に焼かれて私の身体はボロボロになってしまいました。

何度も何度も泣いて泣いて、泣いて…そしてどうして私がこんな目に合わないといけないんだろうと思つた日もありました。

と言うかあまりの厳しさに思わず王城に居た兵士達を叩きのめし

て逃げた時もありました。

煌びやかなドレスから動きやすい服装（後で聞いたのですがその服はマシロ様が作った私専用の服らしいです）に姿を変え、私は王城を脱走して街の外に行きました。

全力で走り続け二時間ほどでしょうか？

お腹が空いてしまい更には喉も乾き、けれど街での買い物が一切分からなかった私にはそれを満たす方法なんて分かりませんでした。

「…おや王女様。今日は街にお出掛けですか？」

そんな時に現れたのが、生まれてからずっと私に指導をしてくださった先生であるマシロ様でした。

今日も訓練をすると知っていた私はマシロ様から全力疾走して逃げようとしたが、その前に微笑んだままのマシロ様が私の手を握りしめました。

握り方は優しく…けれど逃げる隙を与えない様な握り方で手を繋ぎ…街の高級レストランに入りました。

二人で笑顔で言ったマシロ様の手を払って逃げる気力も体力も根性も無かった私は、大人しくやってくる料理を待つ事しか出来ませんでした。

お互い無言のまま時間が過ぎ去り…無言に耐えきれなくなった私は料理に一切手を付けてない（勿論当時の私は気付いていませんでしたけど）マシロ様に話しかけました。

「…あの」

「どうしました？」

「えつと…今日の、訓練なんですけど」

「おや。訓練をお望みだとは思いませんでした」

お道化た様に笑ったマシロ様を見て、私は思わず顔を伏せてしまいました。

…確かに訓練が嫌だったから逃げたのに、話題が訓練だったら「じゃあ今此処でやりますか？」なんて言われるに決まっています！

…まあ、マシロ様の性格を知った今はそんな事を考えませんが…当時の私の心境はそんな感じでしたね。

「心配しなくても今日はお休みですよ。と言うより嫌なら私じゃなくても良いんですよ？別に私は女の子を悪戯に傷付けて喜ぶ変態じゃありませんからね」

そんな風に言っていたマシロ様に、当時の私はかなり驚いていたと思います。

てつきり巷で噂のDS少女かと思っていたので唯虐める事に快感を覚えているんじゃないか：そんな風な妄想を膨らませていた時期もありました。

「二応言いますが、あの訓練に私の趣味嗜好は一切関係ありませんよ？」

少しだけ呆れた様な表情を浮かべながらそう言ったマシロ様を見て、過去の私は疑い深く見ていました。

：まあ、生まれてから今までずっと殴る事すら出来ず唯痛みに耐える訓練：と言うよりは虐めの方が近かったんですけど：を受けていた私からすれば、いまいち決め手に欠ける情報だったとしか言いようがありません。

勿論マシロ様も今の情報で説得させる気は無かったのでしよう。私の顔を見て苦笑しながら喋り始めました。

「えつとですね王女様。もし仮にダメージを食らった場合、即座に反撃できますか？」

「出来るに決まっています」

私の言葉を聞いて、マシロ様が突拍子も無く頬を叩きました。

その瞬間無意識で身体が動き、私は拳で少女の脳を殴って動きを止めようとして：そのまま私の手は少女に掴まれました。

「反撃もちゃんと急所狙いですし、殴られて即座に反撃が出来るのは良い傾向です」

「：それがどうしたんですか」

「もし仮に私がああの訓練をしていなかったら、ちゃんと反撃は出来ていましたか？王女様？」

その一言を聞いて、私は思わず息を飲みました。

：生まれてすぐの私は剣を振るのもやつと。けれど周囲からの誉

め言葉に終始浮かれてばかりで、正直兵士としてはド三流も良い所でした。

……もしかしたら、新兵としても危うかったかもしれません。

「攻撃をしたい。怪我無く倒したい。相手の攻撃を全て避けたい、受け流したい：理想はそうでしょう。けれど現実で傷無く倒せますか？500人からの攻撃を避けられますか？全てが急所狙いの一撃を、貴女は集中力を切らさずに避けられますか？」

私は無理でしたね。

そう言つて笑つたマシロ様を見て、私は思わず息を飲んでしまいました。

…その笑顔の裏に、どれだけの傷や痛みがあつたかなんてわかりませんでしたが：それでも、私以上に苦勞しているという事だけは：昔の私でも理解出来たのです。

「私は神様によつて無限の命が与えられたので大丈夫ですが、貴女達は一つの命しかありませんからね。……だから、私が見れる時にしっかりと死なない術を：とは思つていたんですが…」

「…あ」

後にも先にも、マシロ様が私を撫でてくれたのはこの一回だけです。

お父様の話では一応私が生まれた瞬間、祝福を籠めて撫でてくれたらしいが：私が覚えている記憶ではこの一回しかありません。

「…少しだけ焦り過ぎちゃいましたね。明日からはのんびり、日向ぼっこでもしながら座学をしましょうか」

「…っ！いい、いえ！明日から、いえ今日からでも！」

始めて撫でてくれたマシロ様に、褒めて貰える時にまた撫でて貰えるんじゃないか。

そんな思いが先行して口走つた台詞は、完全に口から出まかせで。でもそれすらもお見通しだったのでしようね。マシロ様は慌てないでと小さく微笑みながら優しく撫で続けて…

「先ずはご飯を食べてからですよ。気分転換になるなら一日くらい遅れたつて良いんですよ」

「…う」

「戴冠式までは、一緒に居ますからね」

その言葉を聞いて、昔の私は少しだけ口を緩ませてしまつて。

…けれど魔剣の勇者によつて友達が死に絶え…

「ごめんなさいアイリス様。約束、果たせそうにありません」

そう言いながら去つていったマシロ様の顔と魔剣の勇者と呼ばれたあの冒険者の姿を…

「…アイリス様。今日はこれくらいで」

「そうですわね。ありがとうございます」

私は絶対に、忘れない。

油断した。失敗した。裏切られた。

後悔後先に立たずとは言いが、流石に今回は後悔したくなる程の裏切り行為だ。

しかも裏切った奴が速攻で死んだと来た。

恨み節を言う相手も居なければ今日の前で戦ってる相手に言い訳を出来る訳でもない。

「っ…このやつ…インフェルノ！」

相手に向かって上級魔法を使うが、相手は刀を逆に構え…そのまま一閃。

それを見て私は思わず舌打ちをしつつ、新しく魔法を使って相手の視界を完全に塞ぐ。

炎、雷、爆発、炎、水、炎、氷、稲妻、爆発。

全部直撃させた筈なのに大したダメージも無く、私の方を見て瞬時に追い続ける様に腕を斬り付ける。

弾け飛ぶ右腕を掴んで回復魔法を使い、鍵束から杖を手に入れて魔法を多重詠唱を行う。

「千重詠唱！インフェルノ！」
ミリフレックスキャスト

魔力だけではなく生命力がゴリゴリと削れ、私の首から下が全て動かなくなってしまう。

大量の炎が私達を包み込み、それを見た相手の動きが一瞬だけ止まる。

「オリジナル魔法、魔力コンロ！」

私の一言と同時に大量のインフェルノが一斉に相手に襲い掛かる。

…それを見た相手が私の炎を斬り付けながら近づき始め、振り下ろされた刀によって私の身体は一瞬で二つに別れる。

それを見て私は左手で魔法を唱えると、そのはじけ飛んだ上半身が時が戻る様に戻っていった。

…：それを見た相手が刀についていた血を切り払うのと同時に、私の首筋に刀が押し付けられる。

声を上げて意識を保とうとしているが、意識は朦朧としだし瞼がだんだんと下がっていく。

このまま失神すれば相手を殺せる機会が無くなってしまいうので舌を噛んで意識を保ち、私の身体は高温によって溶け出す。

私の魔力の影響で空いた穴に自分の復活した左手を突っ込み、其処に今まで溜まった魔力を全て集める。

「っ喰らいなさいーエクスプロード・グランドクロス⁺架^架！」

私の言葉と同時に、私の左手から白い十字架が発生して私と冬將軍を包み込む。

そのまま瞬時に私達の周囲の雪が消え去り、此処一帯が焦土となる。

…私の意識と身体がゆっくりと戻り始め、まず視界が戻った瞬間：「っ!？」

冬將軍が私の首に刀を振るおうとし、そのままの姿勢で止まる。

…よく見れば冬將軍の身体は殆どが溶けかかっており、片足と片手だけで私の方まで迫り着き…そのままの姿で立ち止まったのだろう。

私の首筋と刀の距離は約一c m。後一秒でもあれば私は今日何度目かの死を体験していただろう。

「…警告出さないといけませんね。雪精達を狩るのは暫く禁止させた方が良いでしょう」

私の冒険者カードには冬將軍と書かれた討伐記録が残っており、目の前には半分だけ残った冬將軍が刀を振り下ろす前の姿勢で止まっていた。

…取り敢えず冬將軍を解体して素材を手に入れて、その後に色々考えを…

「んっ…なんですか突然」

考えを纏めようとした瞬間、一匹の雪精が私の頬を突き始めた。

攻撃と呼ぶには余りにも弱く、そもそも雪精は攻撃をしない大人しい性格の持ち主だ。

冬將軍がやられたから仕返しに私に攻撃を入れたのだろうか？とも思ったが他の雪精達は特にふわふわと浮いているだけだった。

それを見て私は更に首を傾げるが…雪精が私の服の中に入って身体がひんやりとし始める。

「ちょ?!雪山でそれは冷たいんですけど…ひゃ、動かないで下さいよ!…っ!…しまいにや斬り付けますよ!」

私の言葉に反応したのか、それとも余りの寒さに暖を取って満足したのかは分からないが…満足そうな表情で出てきた雪精を私は思わず睨み付ける。

正直後ちよつとで冷たさで心臓が止まって冬眠永眠しそうになったのだ。

これくらいは許されて然るべきだろう。

「…何ですか次は。私の手にくっ付いて…ん?この刀を取れって事ですか?」

私の言葉を聞いているのか居ないのかは分からないが、私の手に移動してから冬將軍の持っていた刀の方に移動した雪精を見て…私は刀を手に取る。

鋭い刃は氷みたいだが、普通の氷にあるまじき耐久性と鋭利さを兼ね備えている。

そして持ち手は雪を掴んでいる様にふわふわなのに、何故か持っている手から暖かさが伝わってくる。

「…これは神器何でしょうか?こんな風な武器を持っていた日本人が居た気がしますが…」

『……これは神器の偽物。本物は遥か遠くに御座います』

「っ!」

私以外の声が聞こえて周囲を振り向けば、八方向に私が倒した筈の冬將軍が現れていた。

…囲まれた。

先程の魔法を使えばもう一度撃退は可能か?とも思いつつも、私は左手に魔力を籠めて周囲を警戒すれば…突然の風によって私の魔力はあらゆる方向に飛ばされた。

「っ!」

『落ち着いて下さい。私達精霊に戦う意思は御座いません…勿論、貴

女が望めば戦う事も吝かではないのですが』

「…分かりました。貴方達が襲わないのであればこちらも交戦する意思はありません」

『助かります』

私の言葉と同時に、八方向全ての冬將軍達が私に膝を付けてお辞儀をし始める。

…確か合手礼と呼ばれるお辞儀方法だったかな？

「この刀は元に戻した方が良いですか？」

『雪精が認めた以上、私からは何も言いませんよ。それは雪精なのですから、本人が認めた以上精霊は何も言えないのです』

「…それは雪精…つまり刀自体が雪精だと？」

『その通りです。冬將軍と戦う時、危険なものにも関わらず雪精達はずっと残っていたでしょう？』

「あれは守り神の様な物が現れたからと思っていたんですが…実際は逆だったんですね」

そういえば私が魔法を放つ瞬間も、その魔法に向かって一目散に向かっていた気がする。

あれは一矢報いる為に向かってきたのではなく、冬將軍を回復させる為に向かってきた…と言った所だろうか。

「…どうして今日、今まで現れなかった冬將軍が現れたのですか？」

『精霊は人のイメージから具現化します。積み重なったイメージが漸く今日、こういう形で具現化したのです』

「…成程。日本人の所為ですか」

私がため息を吐きながら刀を撫でれば、その刀はポンと言う音と同時に雪精の姿に戻った。

…それに驚いていると、目の前の冬將軍の身体に入り込み…傷がだんだんと治っていく。

そして完全に傷が治ると私の方に赤い目を向け、片膝を付けて消えた筈の刀を私に差し出した。

「…彼らも不死身なのですか？」

『不死身とはまた違いますね。貴女の自爆に似た技によって確かに目

の前の冬将軍はその役目を終えて眠りにつきました』

「……」

『ですが雪精とは無限に存在する物。冬と春が存在する限り雪精は無限に生まれ…そして無限に消える。』

それを受け入れて今まで消滅していた雪精達が、貴女達のイメージによって冬将軍に生まれ変わった…という認識が正しいでしょうね』
「つまり冬将軍を完全に抹消させる事は出来ないか？」

私の一言と同時に、今まで吹いていた風が吹き止んだ。

…それと同時に、優しい声から一転し心を驚掴みする様な声が私の頭の中で響き始めた。

『一度固まったイメージはもう二度と覆せない。もし完全に消滅させたいなら生まれてくる雪精を倒し冬将軍を片っ端から斬り飛ばせば良いんです』

「…?!」

『最も…それを人類が出来るかどうかと言われれば…無理と言わざるを得ませんけどね』

その言葉と同時に、私の首が切断されて瞬時に凍り付く。

…目の前の冬将軍がやった訳ではない。つまり未だ精霊の姿を保っている「ナニカ」が私を殺そうとしたのだろう。

私の首が落ちて八方向に居た冬将軍が消えたのを見てから、私は首を拾って切断面をティンダーで温めて回復魔法でくつつける。

「…それでは遠慮なく貰いましょうか」

そう言いながら私が冬将軍の刀を取ると、冬将軍はあっさりとその姿を大量の雪に変えた。

…そしてそのまま三匹の雪精達が空に昇り始め…私は漸く終わつたため息を吐いた。

何度も斬られた首を触りながらも、私は持っている武器を見つめて…そして小さくため息を吐く。

「……後五十年くらい刀の練習しましょうかね」

冬になる度に冬将軍に稽古をつけて貰おうかなと、未来の予定を立てながら…私は自宅に移動する為にレポートを詠唱した。

原作開始

0話

アクセルに住んでから数か月、私は酒場で飲んだり近所のサキユバスのお店に行ったり依頼受けたりサキユバスと色々したりリッチーの女性に捕まったり嫉妬で狂った安楽少女に脳内麻薬打たれて死にかけてりしていた。

…最後のは殆ど自業自得の様な物だったが、まあそれはそれで幸せな日々だったのでよしとする。

そんなこんなで今日もアクセルに居る訳なのだが、理由はちゃんとあるのだ。

勿論何処かの冒険者の様にサキユバスが居るからではない。

「…変な敵意。いえ、変な悪意を感じる様な気がしますよね。何時もなら神聖な気配で打ち消されるんですけど、今日は何故か無いですし」

「……変な悪意って何？」

「やあ……？」

変な悪意は変な悪意だと小さくため息を吐きながら言うと、目の前の少女は困った様な表情で首を傾げてしまった。

その事に苦笑しながらゆっくりと私は酒場の天井を見上げ…

「っ!？」

「……？」

何かが降ってくる。

慣れ親しんだその感覚から、転生者が降りてきたというのは直ぐに分かった。

…けれど、この空気は何だろう？

水の精霊が自らを守るように離れていく。神聖な力が一つの場所に集っていく。

……まさか新しい転生者は神様なのか？

「…どうしたの？急に天井見て吃驚するなんて…小蜘蛛でも居た？」

「……い、いえ。何でもありませんよ」

「そうなの？まあもし何かあるんだったら教えてね。私達は…と、友達だから…えへへ…」

「そうですね。私とゆんゆんは友達ですからね」

「えへえ……」

突然何処かにトンドンでしまった少女を見ながら、私はため息を吐いてゆっくりと冒険者ギルドの扉を見つめ始める。

…登録料で二千、装備は…特典次第で三千程度。最後に食費合わせで合計一万程度だろうか。

硬貨を指で弾きながら私は料理を頼み、そのままずっとトリップしている少女の額に1エリスを乗せ続けるという悪戯をし始めた。

「……ふむ」

50エリスは新記録だ。

勿論乗せられた数が新記録ではなく、トリップしている時間が新記録だけで眠っている間にやった遊びの時は2000エリスまで乗せた記憶がある。

勿論魔法やスキルをフル活用した結果ではあるが。

「…はっ!？」

「54エリス。今回は60エリス狙ってみましょうか」

「ちよ、何をしているの!？」

「ゆんゆんトリップショー」

「なんか卑猥?!」

実際は呆けてるゆんゆんに唯々硬貨を乗せ続けるだけの異様な光景だが。

そんな事を考えながら私は魔法を発生させ、硬貨を一気に片付ける。

それを見たゆんゆんが私をじっと見た後に…

「…むう。また新しい魔法作ってる…」

私の冒険者カードを見てため息を吐いていた。

…その事に少しだけ頬を緩ませながら、私はゆんゆんの頭を優しく撫でる。

えへへと嬉しそうに撫でられたゆんゆんはとても撫で甲斐があるのだ。そのまま持っていた櫛を使って髪を梳かしてあげれば、とろん。とした表情が見える。

「…ん」

「紅魔族の里が出来てから居ましたからね。魔法の作成と扱いは紅魔族一と自負していますよ?」

「……(うまじょくじやにやい…」

「ふふ。そうですね」

ふにやふにやしているゆんゆんの会話を流しながら、私は優しく髪を梳かし続ける。

…そしてそのまま眠ってしまったゆんゆんの頭を撫でてから…私は目が覚めるまで周囲の音が聞こえなくなる魔法をゆんゆんに掛けて、そのまま新たな転生者を待った。

今回の転生者は果たして善か悪か。どちらだろうか?」

「いいかアクア、登録すれば駆け出し冒険者が生活出来る様に色々チュートリアルしてくれるのが冒険者ギルドだ。金を貸してくれるか、駆け出しでも食っていける簡単な仕事を紹介してくれて、オススメの宿も教えてくれるはず。今日の所は登録と金の確保、そして泊まる所の確保だ」

「分かったわ。その辺は、最近トラックに飛び込み自殺して私の所に来てた多くの人達が、似たような事言っていたから把握してるわ。私も冒険者として登録すればいいのね?」

「そういう事だ。よし、行こう」

彼らか。

男性一人に女性一人、という事は心中か同時に死んだ他人のどっちかだろう。

…あ、並んでる方に行った。あの受付さん達可哀想。

「……ねえ、他の三つの受付が空いてるのに、何でわざわざここに来たの? 他なら待たなくてもいいのに。……あ、受付が一番美人だからね? 全く、ちよつと頼りがいがあると感心した矢先にこれ?」

「ギルドの受付の人と仲良くなっておくのは基本だ。そして、一番美

人な受付のお姉さんってのは、なぜかギルドの冒険者達に恐れられてたりだとか、実は凄い実力者だとかで、一目置かれてる可能性が高い。これはこういった世界での基礎知識だぞ。そういった有力者とコツコツとコネを作つとくと後々助かるんだよ」

「……私がバカだったわ。そういえば、そう言った話を聞いた事がある。ごめんね、素直にここに並んでおくわね」

あつこれ同時に死んだ他人だ。

しかも片方は余り男性の事を知らない箱入り娘だろう。

…待って、箱入り娘が死んだつてもしかして心中の可能性あつたりする？

分からなくなってきた私は頭を抱えつつ、ゆっくりとあの二人の歩き方や会話を聞き続ける。

……暗号は無し、動作でモールスも無し。二人の怪しげな動作もない……ちよつと女の方が煩い位かな。

という事で私はあの二人を善魔王に属さない者よりの人間と判断する事にした。

「はい、どうぞー。今日はどうぞされましたか？」

「えつと、冒険者になりたいんですが、田舎から来たばかりで何も分からなくて……」

「そうですか。えつと、では登録手数料が掛かりますが大丈夫ですか？」

その言葉を聞いて固まった二人を見て、私は膝に乗っていたゆんゆんの頭を優しくどかしてから立ち上がり……そのまま二人に向かって歩き始める。

…まだ気付いていない二人に気付いた案内の方が頬を赤らめ……そのまま小さく咳払いをしてからチラチラと私を見つめだした。

……どうしたの？急に。

取り敢えず袋を浮かせて1000エリスを20個取り出し、そのまま気付かれない様に歩き続ける。

「……おいアクア、金って持ってる？」

「あんな状況でいきなり連れてこられて、持ってる訳無いでしょ？」

「御二人共、お困りですか？」

私の一言を聞いて、二人がびくりと肩を震わせながらこちらを見つめた。

…悪戯は成功したらしい。

取り敢えず2000エリスを置いてから顔見知りの受付に対して説明をする。

「お疲れ様ですルナさん。この二人は私と同じ出身でして…支払いは私がしますので宜しければ登録して貰えないでしょうか？」

「は、はい！大丈夫です」

受付のルナさんに小さく微笑みながら話しかければ、すぐにルナさんが頷いてくれた。

その事に感謝しながらも、私はゆつくりと二人のポケットに9000エリスずつ入れておく。

「それでは御二人共良い旅を」

「…お、おう。ありがとうな」

「いえいえお構いなく。折角の異世界なんですから色々楽しんでくださいいな」

二人だけに聞こえる様に小さく呟くと、男性の方は小さく親指を立ててサムズアップした。

…もう一人の方は視線を右往左往させているのを見るに、どうやら初対面の人と話すのが苦手らしい。

そんな同業者や冒険者の人も沢山いたなあ…なんて考えながら、私はゆんゆんの眠っている場所へ向かおうとすると…

「……えっ…あ、…その…」

「どうしたアクア。急に俺みたいなコミュ障以下の口になりやがって」

「う、煩いわね！こちとら心の準備が必要なのよ！…じゃなくて、えつとね…？」

先程のコミュ障少女に話しかけられた。

…困った。彼女は突然呼び止めた後に『我が名は○○、転生者にして神器○○を貰った者。日本人随一のコミュ障。やがてはリア充となる者！』とか言わないよね？

……ちよつと見てみたいかも。

「わ、私の事を覚えてる？」

しまった出会い系だったか。

……いや姿を変えた同業者の可能性もある。そもそも私は青髪の少女を覚えていない。

というか何なら隣の男性すら覚えていない。

記憶は確かに剥がれ落ちた所ではなく、お気に入りのラーメン店が何処にあるかすら覚えていない程度に日本の記憶がないが……流石に日本で出会った青髪の少女なら覚えている筈だ。

……だけど私の記憶にはない。という事は……つまり……

「えっと、誰かと間違えていると思いますよ」

「ぶっ」

私の一言を聞いて思わず隣の男性が嘔き出し、それを見た青髪の少女が怒りだす。

「だってよアクア。やっぱりあそこでぼーつとしていた女神様なんて覚えてないんじゃないか？」

「なあ!?!ふざけないで頂戴よ!私と約束を交わした仲じゃない!というか、普通こんな可愛いめ・が・み・を!忘れる訳ないでしょう!」

「……約束……女神……?」

覚えてない。

というか何?突然女神って言いだす輩とか信用ならない……ん? “アクア”?

……直訳すれば水、偽名の使用だろうか?先程の決定を取り消して悪よりに……いや、違うか。

“アクシズ教”を知っているのはこの世界の住民だけ、更には水を司る宗教は地球では無かった筈。

という事はもう一人の少年の名前を知りたい。

「そうなんですネ。所でもう一人の御方の名前は……」

「ん?……成程な。俺の名前は佐藤和真。……一応あいつは本物の女神だ」

私達は声を潜めたまま喋り出す。

…本物の女神か。どうやらかなり良い特典を貰ったらしい。
という事はあの時の神聖な気配は青色の少女が降りたから…とい
う事か。

「…という事は…『特典』はそういう事なんですか？」

「そうだ。そういうお前は…？」

「……この鍵束と、だけお伝えしておきますね」

その言葉を聞いた彼が首を傾げた後に…

「あの…冒険者登録がまだなんですけど…」

「あつすいません」

私達の話が長かった所為でルナさんが怒ってしまった様だ。

私と和真が謝り、青髪少女は頬を膨らませた後に……私の袖を引つ

張ってから私の顔に自分の顔を近づけた。

…そのまま数瞬見つめ合ったまま視線を合わせていると…

「…待ってて。絶対一緒に暮らすんだから」

「…？」

「その間に魔王討伐でもするわよ。どうせ私達は不老なんだから」

「まおう…どうばっ…」

その言葉と同時に少女が笑って私から離れるのを見て…私は目を
ぱちくりとさせた後に……小さくあつと呟いた。

十一話

「…その、日本人の誼でさ。旨いクエストとかあったら…」

「あつたら既に取られてると思いますよ。此処の人達、そう言う所だけは早いですからね。なるべく早朝に来て依頼が貼られたタイミン
グで良いクエストを取るのが良いと思いますよ」

「だよなあ…やっぱり一緒には組んでくれないのか？」

「残念ながら、私は国の番犬ですからねー」

魔法で犬耳と尻尾を生やし、わんわんと冗談っぽく言えば目の前の少年が笑いだす。

…まあ、国の番犬だし何なら人類の最終兵器とか対魔王軍最強防壁とか色々言われている訳だが。

そんな私が此処でだらけてるとか聞かれたら、多分絞首刑とかされそう
だ。

何処かの国は私が死なないからって死刑を試す相手とかにしてみました
ね。勿論そのまま返り討ちにして逆に死刑にしてやったけど。

「…お、魔法が手に入った。真白さんも冒険者なんだっけ？」

「そうですね。昔はずっと冒険者でやってましたよ。今は違いますけど
どね」

「…そうなのか？」

「ええ。私専用の職業です」

「おお！格好良い！やっぱり憧れるよなあそういうの…：：：因みに、ど
んな名前だ？」

私の一言に目をキラキラと輝かせた少年を見て、私は思わず苦笑し
た。

…いやまあ、確かに中二病真つ盛りの少年にはこういったお話は好
まれそうだが…別に其処まで良い職業じゃないんだよなあ。

まあ、でも教えるくらいは良いだろう。

「封印された古の冒険者って奴。ちよつとダサイですよね？」

「いやいやいや！封印とか古とかは格好良い物なんですよ！」

…果たして目の前の少年が格好良いからと言う理由で†和真†み

たいに名乗らないか心配である。

そんな事を考えながら私達が話していれば、どうやらアクアがギルドに来たらしい。

正直本物の女神様らしいのだが、私としては別に…というかあんまり信用できていないのが真実だ。

「どうしたのカズマ。急に右腕が疼いたりするの?」

「ああ。お前を待っている間に色々話を聞かせて貰ってな。やっぱり自分だけの職業とか、封印するのは格好良いなあって…」

「自らを傷付ける物を格好良く思えるの?」

あっけらかんと、私の職業の真実をばらしたアクアを見て…私は思わず苦笑してしまった。

…しかし熱弁しているカズマには聞こえなかったらしい。その事に少しだけ安堵しつつも、私は目の前のアクアが本物である事を自覚していた。

「デメリットは誰にも喋った事が無かったですけどね」

「…ずっと見てたんだから当然じゃない」

「あはは、そうなんですわね」

果たしてそれは世界か、日本人全員か、はたまた私不老不死所持者か。

「…一つ言っておくけど、貴女の考えている事は全くの的外れよ」

「……そうなんですわ?」

「ええ。不老不死者、選定の剣の持ち主、八卦の刻印術師…確かに貴方達の動きは天界でもかなり議論されていたけどね」

「そうだったんですか?」

「ええ。魔王に属したら不味い者、魔王を倒す事を放棄した者、魔王にさせたら不味い者…でも二人は未練を残さず死んだからね。後はアンタだけだったという訳よ」

「…えっ、待って。もしかしてマシロさんってかなりの年寄?」

私達が会話をしているとカズマさんが突然会話に入ってきて、その言葉に私は思わず苦笑してしまった。

どうやらアクアは私の事を教えていなかったらしい。

「一応私は初期からの人選ですからね。まあ約数十…」

「私が時間を飛ばしたから初代魔王よりも年寄よ。この子」

「…えっ、マジで…?」

「この国の創始者ともか関わっていますよ?直接挨拶した事もありま
すしね」

「そうなのか?」

「ええ…まあ、そうね」

私の一言を聞いて少しだけ気まずそうにしているアクアを見て、私
は少しだけ首を傾げた。

…一体どうしたんだろうか?

「…:それなら猶更協力して欲しいんだが…」

「駄目よ」

「はあ?!どうしてだよ!」

カズマさんの一言にアクアが即否定するのを見て、私も思わず首を
傾げる。

…いや、まあ確かに協力はしないって言ったんだけど…急にどうし
たんだろうか?

「…:いや、別に何でもないわよ」

「…?どうしたんだアクア。お前、こいつと会ってから変な気がする
んだが?」

「はあ?!変って何よ!この完璧で最高な女神の何処が…」

そういう所だよというカズマさんの声を聴きながら、私はゆっくり
とため息を吐こうとして…:懐かしい気配を感じて振り返った。

…其処には銀髪の盗賊が一人と黄金の髪の戦士が仲良く話し合っ
ていた。

今回は盗賊の衣装なんですわね、なんて思いながら話しかけに行きた
かったが…戦士の彼女と楽しそうに話しているのを邪魔するのも無
粋だろう。

「…どうしたのよ」

「いえ。お話仲間が消えたのを喜ぶべきか、それとも悲しむべきか
迷ってしまいましたね」

「…:ふーん。別に良いんじゃない?」

「ふふ…そうですかね」

「ええ。どうせ後輩の話だから」

小さく呟かれた一言を聞いて、私は片眉を上げた。

…確かに私の話し相手になってくれていたのはエリス…つまりは彼女の後輩にあたる女神様なのだが……それを知っているという事は本物なのだろうか？

というか何処まで知っているのだろうか？私があんなことやこんなことをしたのを知っているのだろうか…？

思わず女神様に何処まで見ましたというセクハラを言いそうになったが、私はその言葉を寸での所で引き止め…

「と、という事はあれなんです。出ていったのは知ってたんですね」
「当たり前よ。あいつが居ない時の仕事、誰がこなしてたと思うの？
天使だけじゃ無理なことだってあるのよ？」

「……あー……」

「…まあ。一番許せないは私が見ている時にエリスが貴女と話してた事だけ……」

最期に何か呟いていたのを見て、私は少しだけ疑問を覚えるが…そのまま何でもないと言ってからゆっくりと私の方に近づいたアクアが…

「…取り敢えず待つてなさい！私達がさっさと魔王を倒して、色々するんだから！約束もあるんだからね！」

「……おーい。俺は魔王を倒さず楽しんで過ごしたいんだが？」

…二人の会話を見ながら、私は小さく笑みを浮かべた。

こんな時代の日本人達を見たなあ…とか、この人達なら魔王倒せそうだなあ…とか。

昔から見ていた日本人達の後姿を見ると、何故だか少しだけの嬉しさと……そして胸にこみあげる何か。

「…っ！カズマ！先ずはグリフォンを倒すわよ！」

「いきなり何言いだし……というか馬鹿！俺は冒険者なんだから其処ら辺の雑魚敵を倒してレベル上げを……」

そう言いながら二人で離れていくのを見て、私は目を瞑り…頬に一

筋の水が落ちるのを感じた。

…二人にはバレてないだろうか？そんな事を考えながら…私は
ゆっくりと涙をぬぐう。

「……あはは。最近は何も涙もろいですね…歳でしょうかね」

「涙に歳は関係ないと思うよ。全ての過去を知る魔女サマ？」

「…その呼び方をされるのは久々ですね。この世界の…つと？」

「ふふ、私と十年話したら呼び捨てで呼んでいいって言ったの忘れた
？クリスだよクリス」

“この時代の依代”の名前を聞き、私はそれを必死に覚える。

というか此処で間違ってもエリス様とか呼んだら、私は普通に殺さ
れる。情け容赦なく殺されるのだ。

「…そうでしたねクリス。お久しぶりです。二年ぶりですか？」

「一年ぶりだよ。毎日元気そうで羨ましいね」

「……ええ。そうですね」

「おや、今は軽口を返せる余裕もないのかい？」

その一言に少しだけ口を緩ませれば、目の前の金髪の少女は私の前
に立ってクリスの方を見た。

…どうしたのだろうか？

「…クリス。こんな幼気な少女を虐めるくらいなら私を虐めろ！」

「……今回のお友達はかなり個性的な方ですね…」

「ち、違うの。私は別にそんな気は無くて……」

私の言葉に慌てて否定するクリスを見て、私は思わず首を横に傾げ
た。

…それを見た金髪の少女が少しだけ呆れた様な表情を浮かべるの
を見て、私は更に首を傾げる。

「…えと…そう！ちよつとした挨拶だったんだよ…ね？ね？だからダ
クネスも気にしな…」

「そういう挨拶は私にするんだクリス！」

「えつと…ダクネスさんがマゾヒストで今回のえ…クリスがサデイス
トなんですネ」

「違うのそういうんじゃない」

「んんっ……この冷めた目でもなく軽蔑した目でもなく、そして勿論恍惚とした表情でいうのではなく自然体で言われる感覚！どうか是非その顔を軽蔑に満ちた表情に変えて罵ってくれないか?!」

突然ビクンとして惚けた表情を浮かべたダクネスさんを見ながら、私は苦笑してしまった。

：いやまあ、DMの方にはそういった人も居るんでしょうけど……折角専門のサディストが居るんだからそっちで満足するべきじゃないだろうか？

「……私はお邪魔っぽいので帰りますね」

「くっ！此処で罵るでも褒めるでもなくあえての放置：貴女こそが真のDSだ！」

「：放置しても終わらない：もと居た場所に戻って下さいクリス」

「えっごめん：じゃなくて！」

クリスが何か言いそうな雰囲気になったので、私はダクネスを壁にしながら一瞬で扉から逃げて屋上に昇る。

：そのまま屋根伝いに移動しながらクリスを撒き、念には念を入れて隠密を入れた。

「……んー？可笑しいですね。此処に居そうな気がしたんですが……」

クリスの正体、つまりエリス様は幸運を司る女神様だ。

：因みに「授ける」ではなく「司る」女神の為、別に信仰しても運が良くなる訳ではないらしい。結局の所プラーシーボ効果なのだろう。

そんなエリス様は純度100%の幸運で身体が構築されている為、自分に対しての運はかなり良くなる。

こういつた探し物もそうだ。何度エリスから逃げようとして……

「みーつけたっ♪」

こんな風に捕まった事か。

私が初めてエリス様に出会ったのは確か何百年も前の頃だ。

不注意で溶岩に落ち、そのままドロドロに溶かされては其処からじわじわと身体が構築されるといふ悪循環になり：それを不憫に思った女神様が：自分の身体に溶岩の耐性が出来るまで精神だけ天界に

移動した頃だろう。

「どうして逃げたんですかね？ 大事なお話、何時もあるって言うんですよ？ それなのにどうして何時も何時も何時も何時も何時も何時も……」

始めは、優しかった筈だ。

仲良く話して、ゲームして、他の遊びして、やっぱりゲームして、一緒にベッドに入って眠ったりして。

更には一緒に死者からの相談を受けたりとか（天使なりきりセツトを貰って嬉しかった）色々な事を十年くらいやっていったのだ。（後に同じ様な目に会った時にアクアに聴いたら、どうやらエリスが時間を弄っていたらしいけど）

…勿論、そんな日々は終わりを迎えて…天界から帰ってきた私は溶岩を泳いで脱出して、宿屋で眠っていたのだ。

「…んっ…誰ですかこんな夜中に…窓から入らず扉から…」

「こんばんはマシロ。エリスです」

「……エリス様？」

なのにも関わらず、エリスは何故か私の前に現れたのだ。

…この日程私は薬を盛ったノイズの研究者を恨んだことはない。後先輩の経験談以外全部私の話をしていたアクアも許さない。

そして百年くらい一緒に生活してたけど結局大事なお話なんて無いのだ。

……彼女は結局、何の気兼ねも無く過ごせる友達が欲しかっただけに過ぎない。

それならもう一人くらい不老不死を作って友達になれば良いのに…そんな風に考えていたが、私の知る限り不老不死の人間は私しかない。

私が使った物以外にも灰とか石とかあると思うのだが…？

「……」

「ほら、出て来てくださいよ？ じゃないと……ふふ、持って帰っちゃお

うかな？…それとも新しい殺し方を見つければ…その対策が出来るまで…一緒に…あはっ…」

取り敢えず私はエリスに精神分析拳を入れようと考えつつ、ゆっくと樽から外に出る。

…其処には嬉しそうな表情でこちらを見ているエリスと…

「…」

それを冷めた目で見ている、バイト中のアクアが居た。